

## ボサノヴァの詩学

今年は「ボサノヴァ生誕50周年」であると言われていています。何を起点として50周年なのか？ 今日はこのことについて話したいと思います。

1958年7月10日、ジョアン・ジルベルトの最初のレコードである「Chega de Saudade」の78回転盤がリリースされました。

ジョアン・ジルベルトはこのアルバムでデビューする以前に、同じ年の4月にリリースされたエリゼッチ・カルドーズのアルバム『Canção do Amor Demais』にギタリストとして参加していますが、そこですでに彼が生み出したギター奏法を披露しています。サンバの打楽器隊が生み出すリズムを右手の四本の指で再現するという、あの有名な奏法です。

さらに、トム・ジョビンとヴィニシウス・ヂ・モライスによる曲ばかりが収録され、トム自身によるオーケストラのアレンジがほどこされたエリゼッチのこのアルバムは、ジョアン以前のボサノヴァの最後の形を体現していると言えます。”Chega de Saudade”を聴いていただきましょう。

### ♪ Chega de Saudade / Elizeth Cardoso

みなさんが「ボサノヴァ」と考えられているスタイルとは少しちがうと感じられたのではないかと思います。何が決定的にジョアンとちがうのか？ それは発声と、ポルトガル語の発音です。エリゼッチは朗々と、クラシック音楽の用語で言う「ベルカント」に近い形で歌い上げています。また「R」の発音にも注目してください。エリゼッチは当時主流だった巻き舌音で発音しています。(Regresse, Realidade, voltaR, nadaR, maR...)

この2点において、ジョアンは別の方法を取りました。歌い方は話しかけるような、ささやくようなもので、「R」も、当時はまだ新しい発音だった、喉の奥にかすらせるような発音(日本語ではハ行に近い発音)になっています。これに注目して、ジョアンの録音を聴いてみてください。

### ♪ Chega de Saudade / João Gilberto

違いに気付いていただけたでしょうか？ このような「R」の発音はしだいに主流になって行きますが、ジョアンがそれを誰よりも早く取り入れた一人だったことは記憶しておいていいでしょう。

ボサノヴァの立役者としてさらに忘れられないのが、詩人ヴィニシウス・ヂ・モライスと作曲家トム・ジョビンです。

ボサノヴァはフランス人監督マルセル・カミュによる映画『黒いオルフェ』によって世界に広まりました。その原作となる戯曲『オルフェウ・ダ・コンセイサオン』を書いたのはヴィニシウスで、その上演の際に新進の作曲家トム・ジョビンと知り合ったのです。この舞台では、ブラジルを代表する建築家であるオスカー・ニーマイヤーも舞台装置の制作に携わっていました。

のちにこの戯曲に付けられた序文で、ヴィニシウスはこんなことを書いています。

数ヶ月後に『オルフェウ・ダ・コンセイサオン』のアイデアを生む萌芽とでも呼ぶべきものが生まれたのは、1942年、友人のアメリカ人作家ワルド・フランクと夕食を共にして

いたときだった。そのとき私は、この『ヒスパニック・アメリカ』の著者が、リオのファヴェーラ、マクンバ、黒人のクラブや祭事を巡るのにつねに付き添い、自らが黒人の精神で満ちているのを感じたのだ。会話が進み、混沌とした連想のプロセスを経て、私たちのなかに突然、自分たちがそれまで見てきた祭典や祭事はすべて、ギリシアと関係があるという感情が生まれた。

あたかも黒人が、この場合はリオの黒人が、ぼろをまとったギリシア人であるかのような——美に関してのアポロ的な文化や風習をいまだに奪われたままの、だがそのせいでディオニュソス的な生の感情が損なわれているわけではないギリシア人。のちに、この作家と共にブラジル北部を旅して、カンドンブレ、カポエイラやバイーアの黒人の祭事を観たときにも、この印象は強まるばかりだった。

ヴィニシウスは自らを「ブラジルでもっとも黒い白人」と呼んだりもしました。60年代にトムがアメリカに渡って以後、ギタリストのバーデン・パウエルと一緒に仕事をすることが多くなり、その頂点のひとつがアルバム『Os Afro Sambas』です。「アフロなサンバ」というタイトルに現れているように、ヴィニシウスはしだいにブラジル音楽、とくにボサノヴァやサンバのなかにブラックネスを見出すようになっていったと思います。

このようなことは、ボサノヴァはリオの高級住宅地に住む白人たちの音楽である、といった偏見をやぶるのに十分な反証になるはずですが、ボサノヴァはその誕生から見てもブラックミュージックだった、とさえ言えるかもしれません。

さて、そのヴィニシウス・ヂ・モライスと出会う以前に、トム・ジョビンは作曲家としてすでに5年も活動していました。この時期の仕事はあまり注目されていませんが、ボサノヴァの誕生を知る上では見逃すことのできないものです。

若き日のトムが、楽譜の書けないサンバの作曲家たちのために採譜の仕事をしていたことが、トムの妹エレナ・ジョビンによる伝記に記されています。そして、この5年間に彼が作った曲には、ルーツサンバ(samba de raiz)、つまり伝統的なサンバに特徴的なコード進行が見られます。その例としてディック・ファルネイが1953年に録音した”Outra Vez”を聴いていただきます。

♪ Outra Vez / Dick Farney

この時期にトムが書いた曲の多くが、のちにヴィニシウスがトムの曲にもたらしたイパネマ海岸に差す陽光のような明るさのない、悲しみに満ちた歌でした。ルシオ・アウヴェス、アンジェラ・マリアといった当時の人気歌手によるトムの曲を聴いていると、トムはボサノヴァの作曲家というよりも、サンバ・カンサォンの優れた作曲家、とさえ思えてきます。しかし、この時期のトムの曲を、ジョアン・ジルベルトはその魔法のような解釈によって「ボサノヴァ」に仕立てています。聴いていただきます。

♪ Outra Vez / João Gilberto

ディック・ファルネイの録音は1953年、ジョアンの録音は1958年で、それらのあいだには実際には5年の隔たりしかありませんが、ほとんど隔世の感がするのではないのでしょうか？

最後にもうひとつ、「ボサノヴァのミューズ」と呼ばれた女性歌手、ナラ・レオンによる同じ曲の録音を聴いていただきたいと思います。

♪ Outra Vez / Nara Leão

これが録音されたのは1980年で、今お聴きいただいたジョアンジョアンの録音から実に22年もあとのものになります。しかし、これら二つの録音がその美学的な意識においてきわめて近い、ということは明らかではないでしょうか。ジョアンジョアンの音楽の影響力はこのように決定的なものでした。

ボサノヴァを作ったのがジョアンジョアン・ジルベルトであると言われるのは、このような意味においてです。そのために、ボサノヴァが生まれた年を1958年とすることも、じゅうぶんに理由のあることなのです。